

他者経験の構造と発生 : フッサール『デカルト的省察』を読み直す

浜渦, 辰二

<https://doi.org/10.15017/1397837>

出版情報 : 哲学論文集. 23, pp.23-42, 1987-09-20. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

他者経験の構造と発生

——フッサール『デカルト的省察』を読み直す——

浜 渦 辰 二

はじめに

我々は日常の生活において絶えず他者と関わっている。そこでは、我々が他者を経験しているということは、極めてあたりまえのこととして、我々の行為の基盤となっている。ところが、それでは我々は他者を如何にして経験しているのかを語るうとすれば、我々は困惑に陥ってしまう。それは、伝統的な「他者認識」の理論の行き詰まりによつてつとに示されて来た所であり、これに対してはまた、多くの批判や解決が試みられて来た。しかし、その際、他者経験は様々な仕方論じられているということが注意されねばならないだろう。例えば、他者経験とはそもそも何であるか、という問いは、それが如何にして生じるか、という問いとはさしあたり異なる、と言わねばなるまい。フッサールが『デカルト的省察』や『間主観性の現象学へ』等において展開した他者経験論も、伝統的な議論の延長上に展開されていると言つてよいが、ここでも、彼

が他者経験を問題にするのはどのような仕方においてであるのかが、まず明らかにされねばならないだろう。

ところで、伝統的な「他我認識」論に対しては、次のような批判が様々なヴァリエーションにおいて繰り返されて来た。曰く、——如何にして我の「内在」を越えて他者という「超越」に至るのか、という問いの立て方そのものが誤っており、それが、伝統的な理論を袋小路に導いた元凶である。初めに与えられているのは我ではなく、我と他者が無差別の体験であり、それゆえ問題はむしろ、そこから如何にして我と他者という区別が出て来るのか、というように立て直されねばならない——と。⁽¹⁾しかし、この批判が、適宜変更を加えてであれ、フッサールの他者経験論にも向けられるならば、それはどうも彼の様々な試みを伝統的な図式のなかに押し込めてしまった上で、その戯画化されてしまった理論に批判が向けられているように、筆者には思われる。「我の内在から他者の超越に至る道を求める」という思考にはどこかおかしな所があることは、フッサール自身が『デカルト的省察』で他者経験を論ずるにあたって、まず、最初、述べていることである。⁽²⁾なるほど彼は、我に固有な (eigen) 領野における経験と、それに基づけられつつ、それを踏み越える異他な (fremd) ものの経験としての他者経験 (Fremderfahrung) を語るが、彼がそれによって語ろうとしているのは、言わば、他者経験の「構造」であり、それは伝統的な「他我認識」の問いと一緒にされてはならないと共に、それに対する先のような批判ともまた、問いの性質が異なるものである。おおよそ、或ることの「構造」を問うことと、その「発生」を問うことは、密接に交錯しながらも、安易に混同されてはならない二つのことであろう。このような「構造 (Struktur) への問い」と「発生 (Genesis) への問い」⁽³⁾の関係を中心に、フッサールの他者経験論を検討することが、ここでの課題である。

一 他者によって媒介された自己経験

我々は人間として共同性のうちに生まれ出て、他者との交わりのなかで自己を形成し、この関係性のうちで生き、そして

またそのうちで死ぬ。その際、他者と絶えず交際しながら生活しよう、隠遁生活のなかで孤独に生活しよう、我々の生はすべて或る共同性の烙印を押されたものである。こうしたことは、フッサールにとつてもまったく自明のことであった。彼のテキストを見てみよう。「あらゆる人間の生は、交流的 (kommunikativ) な生である」(VIII. 394)、「人間は孤立してではなく、社会性のなかで生きている」(XIV. 401)。更にもっと強く、彼はこうも言っている。「私の生は、初めから共同体的生である」(XV. 420)、「私は初めから他者と共に生きている」(XV. 527)。つまり、私の生は、まず、それだけで前社会的にあり、それから、他者との関係に入ることによつて社会的な生となる、というような訳ではなく、孤立した主観などというものは、「共同精神」⁽¹⁾とも呼ぶべき共同体的な生からの抽象によつてのみ得られるのである。ここにおいては、自己を経験することは、他者を経験することと相關的にのみ生じることが出来る。それ故、フッサールはこう述べる。「他者からの区別において、各自は、自己を初めて同定する」(XIII. 244) 或いは、「我は、汝との対比において初めて構成される」(XIII. 247) と。

しかし、以上に対しては容易に疑問が生じる。こうした記述はすべてフッサールの言う自然的態度と自然的世界、或いは、人格的態度と人格的な生世界 (Lebenswelt) の記述であつて、自然的及び人格的態度が「実践的な生の態度」(XIII. 449)として交流的であるとしても、彼が書齋で孤独に哲学を開始し、現象学的還元を遂行すれば、世界と他者のすべては括弧に括られ、単なる現象と化し、「独特の哲学的孤独」(VI. 187) がもたらされるのではないかと。確かに、フッサールはそう述べている。しかし、それが何を意味するかは注意深く理解されねばならない。還元によつて世界と他者は失われるのではなく、まさに問題となるのであつて、自然的態度において世界と他者が如何に与えられているのかが現象学的な分析のための「指標」・「手引き」となるという、フッサール自身がしばしば注意していたことをここで繰り返す必要があるまい。しかし、特に他者経験という問題との関係においては、現象学的還元が所謂「内的知覚の明証」説と結びつけて理解されてはならない (vgl. XIII. 149) と必ずやこれを確認しておく必要がある。

例えば「イデーニ^{II}」のなかに、次のようなくだりが見られる。「私の体験は私には直接に与えられるが、他者の体験は私にはただ間接的に感情移入によって (einfühlungsmäßig) のみ経験され得る」(IV. 200)。この一步先には、「内的知覚の明証」説から出発した伝統的な「他我認識」論の陥った袋小路が、待ち構えているかのように見える。しかし、『論理学研究IIの2』の付論「内的知覚と外的知覚について」においても既にフッサールは、「もし、我ということでも誰もが理解すること、誰もが自己知覚において知覚しているものを理解するなら、我についての知覚のすべて、或る心的状態という我に関わる知覚のすべてが明証とは限らない」と述べ、「内的知覚と外的知覚は、これが自然的に理解されている限り、まったく等しい認識論的性格を持つもの」であり、ブレントラーノ流の「内的知覚の明証」説は維持しがたい旨を述べていた(LU. II/23ff.)。この「内的知覚の明証」説批判は、フッサールのその後の展開においても絶えず繰り返される⁽⁶⁾ところである。自然的に理解された内的知覚は、人間としての我に関わっており、それは暗黙のうちに、他の人間としての他者を前提し、人間達の共同体とその世界を前提し、このように予め了解され出来上がった世界のうちの一人の人間として理解された限りの我に関わっているのである。このような意味での内的知覚・自己経験は決して直接的(無媒介的)に明証的な知覚ではなく、既に他者への関係をうちに含み、他者経験を暗黙のうちに前提し、他者によって媒介された自己経験なのである。フッサールは、この自然的な意味での自己経験が他者に媒介された経験であることについてしばしば語り、こう述べている。「私が自己を人間として経験するのは、他者という迂回路を通じてである」(XIV. 416)。彼によれば、「人間」というのは、「世界の内の人間」(I. 115)として、世界を前提する「世界概念」(XVII. 259)であり、私自身を一人の人間として捉えるのは、他者を人間として捉えるというそのことが私自身に振り返って移されることによつてなのである(IV. 167)。従つて、そこから逆に次のことが言えるようになる。即ち、「他者が最初の人間であつて、私ではな⁽⁷⁾」(XIV. 418)、それ故更に、「私は、他の人間の経験を直接に持っているように、人間の人格としての私の無媒介的経験、直接的自己経験を持たない」(XV. 665)と。ここにおいては、直接的に与えられる私の体験(例えば、私の痛み)を越えて如何にして他者の体験

(他人の痛み) が間接的に経験され得るのか、などという問題は起こらない。

現象学的還元は、現象学が上のような意味での「内的知覚」に関わるものではないことを言うためにこそ導入された、と
言うこともできる。しかしフッサールは、このように他者への関係をうちに含み、他者経験を前提する内的知覚と混同され
てはならないものとして、他者経験を前提せず、他者によって媒介されていない「原初的 (primordial) な自己経験」を語
り、これについては一転して、他者経験はこのような原初的な自己経験に「基づけられて (fundiert) いる」と言う⁽⁸⁾。自然
的態度においては、我と他者を相関的とするフッサールは、現象学的還元の遂行後には、他者との関係に先行する「原エゴ
(Ur-ego)」(XV, 14) を語り、この意味においては、「私が超越論的 (transzendental) には、最初のものである」(XV,
114)⁽⁹⁾、と言う。それは、どう理解されるべきであろうか。彼の言う「原初的」とは何であろうか。

二 原初的世界経験

私は、世界を「私の私的 (privat) な世界としてではなく、間主観的 (intersubjektiv) な世界として」(I, 34; vgl. III,
91f.)、即ち、万人にとって共通の一つの世界として経験している。それはとりもなおさず、我々の世界経験には、暗黙のう
ちにであれ、他者への関係が含まれている、ということの意味している。例えば、私が眼の前の或る事物を「本」として経
験する時、その持つ「精神的述語」(例えば、「誰かが書き、誰かが印刷し、誰かが売り買いし、誰かが読む」といったよ
うな) は、「その起源と意味からして他の主観とその……志向性を指示している」(I, 124, 127)。また、およそ世界のうちの
或る事物を経験することは、抽象的な個々の主観と個々の客観との「主観—客観」関係という実験室のような場で生じる訳
ではない。その意味で『形式的論理学と超越論的論理学』のフッサールは言う。「世界経験は、私のまったく私的な経験なの
ではなく、共同体経験 (Gemeinschaftserfahrung) である」(XVII, 243)。同じく彼は『ヨーロッパ諸学の危機』のな

かでは、次のように記している。「我々は世界知覚において孤立しているのではなく、そのうちで同時に他の人間との繋がりを持つている。……およそ世界は、個別化された人間にとってのみ存在するのではなく、人間共同体にとって存在するのであり、しかも、端的に知覚的なものの共同化によってそうなのである」(VI.166)。或いは、「物は初めから、万人にとっての物である。……私が、たとえまったく一つの物に向かう時も、私は、少なくとも潜在的には常に、共に表象する者、共に認識する者としての他者に関わっている」(VI.468)。我々の世界経験が常に既に他者への関係を含み、暗黙のうちに他者経験によって媒介されていることは、フッサールにとって自明のことであった。

にもかかわらず、いや正確には、それ故にこそ、彼はエポケーを遂行する。周知のように、フッサールは「省察」で他者経験を論じるにあたって、まず、まさに「問題になっているそのもの」(他者経験)を遮断し、他者を度外視し、我々の経験から「異質な (fremd) もの」——「他者に負っているもの」(XV.528f.)——を捨象して、「固有な (eigen) もの」の領野へと還元する (I.124ff.)。こうして他者経験によって媒介されていない固有性領野 (Eigenheitssphäre) を限界づけ (I.134f.)、¹⁰ において言わば「最初の他者の登場」(XIV.475)を、即ち、他者が如何にして根源的に経験されるかを浮き彫りにしようとする。この固有性領野への還元は、現象学が或る意味で「独我論的」な「各自的 (eigen) 主観性からの出発」(XVII.243)を持たざるを得ないことを表しているとはいえ、それは、自然的に理解される意味での独我論へ導くものではない。それ故、例えば「蔓延したペストが私一人を残す」(I.125)とか、「船の難破のような偶発事によって人間の共同体から引き離された単独者」(VI.188)とかいった意味での「認識論的ロビンソン」¹⁰ をもたらずものではない。というのも、人間としての自己の経験が他者によって媒介されていたように、こうした孤立した人間としての独我は、相変わらず、他者への関係を含み、他の人間達の共同体と世界を前提しているからである。「こうした抽象はラディカルではない」(I.125)とフッサールは言う。

彼の考えるもつとラディカルな「抽象」は、こうした言わば「複数で演じる独我論という滑稽劇」¹¹ へ導くようなものでは

なく、それがもたらすのは、他者への関係をまったく含まず、他者と相関的な私ではないような、複数において考えられることのできないような「原エゴ」にとつての経験とその世界であり、それは「原初的 (primordial)」と呼ばれるような、経験の「一つの本質的な構造」(I. 125) であり、世界の「一つの層」(I. 126) である。それが「方法的」な抽象によつて初めて取り出される抽象的な「層」であることをフッサールは絶えず強調している。それは、⁽¹²⁾ 彼が次のことをはっきり意識していたことを表している。即ち、自然的な経験においては、「原初的」経験なるものが具体的な経験の段階としてある訳ではなく、「原初的」な世界なるものが自立的なものとしてそれだけで与えられることはない、ということのみならず、また逆に、自然的な経験においては、容易にこの原初的経験が跳び越えられ、常に既に他者経験によつて媒介されている、ということである。

フッサールは、原初的経験の世界がこのような「抽象」によつて取り出されるものであるにもかかわらず、「基づけ (Fundierung)」の働きをする「下層 (Unterschicht)」(I. 127) である、と云う。ここで振り返つて、次のことを確認しておくべきである。即ち、彼が他者経験を問うのは、「客観的世界の超越論的な問題」(I. 121)、つまり、我々が世界を客観的・超越的なものとして経験しているその根拠への超越論的な問いとの連関においてであつた (I. 124) ということを。彼の他者経験への関心は、専ら、このように超越として経験される世界の「構成 (Konstitution) の秩序」において占める他者経験の役割にある。原初的世界は、我に固有な領野とは言つても、それは世界の分割された一部であるでもなければ (I. 134)、意識内在的な世界なのでもない。そこにおいても既に、フッサールの言う「背景」や「地平」の経験によつて、即ち、「現前 (Präsentation)」(例えば、箱の見える側面の知覚) を越える「共現前 (Appräsentation)」(箱の見えない側面の共知覚) (I. 139) によつて、或いは、与えられるものを越えて思念する「より多くの思念 (Mehrmeinung)」(I. 84, 151) によつて超越の経験は成立している。しかし、それは、「構成の秩序において……それ自身で最初の、即ち、原初的」な超越(或いは、「世界」)(I. 136) であり、これに「基づけられた段階」として他者経験に媒介された「構成的に二次的な、本来的な意味での客観的

な超越」(ebd.)が成立する。詳しく見れば、フッサールは超越の経験を三つの構成の段階において考えている。即ち、第一に、内的時間意識における時間的客観(過ぎ去るもの)の構成(XI. 204f.)、第二に、地平意識による原初的世界の構成、第三に、他者経験による間主観的世界の構成、という段階においてである。⁽¹³⁾このように、他者経験は、より高いレベルでの超越の経験を可能にするのである。

この下層である原初的経験(とその世界)と、それに基づけられた間主観的経験(とその世界)との関係をフッサールは、「前者なしに後者を持つことはできないが、その逆は成り立たない」(I. 127)という「一方的基づけ」の関係と考える。それは、「一方が他方を前提している」という意味において、「まず、一方が成立して、それから初めて、他方が成立する」という言い方でも表現され得る。しかしそれは、このように「まず(erst)……それから(dann)」という「発生の比喩」(V. 125)もしくは「虚構的発生」(XIV. 47f; vgl. VIII. 177)によつて考えられるとしても、こゝに「心理学的な発生」が考えられてはならない(V. 125)。原初的経験が「最初のもの」と呼ばれるのは、「発生的・時間的ではなく、志向性の基づけに従つて」(XV. 19, 107)であり、また、間主観的経験への「移行」(XIII. 370; XIV. 60)が語られるのは、「構成の秩序」においてであつて「時間的に経過する発生」(I. 136)におつてではない。それ故に、こゝで問題になっているのは、「静態的(statisch)な分析」である(ebd.)、とフッサールは言う。それが目指しているのは、「構成の秩序」において他者経験が担っている構造、他者経験の意味・本質を説明することである。では、それはどのような構造を持つているのだろうか。

三 他者経験の構造

我々が他者に出会う時、我々は他者を眼前に知覚し、経験している。それはフッサールにとつて自明のことであつた。彼は言う。「私が他者を『見て』、彼を理解し、彼の表出を追う時、私は或る程度、彼のうちで生きる」(XIII. 337)のであつ

て、そこでは、「私(フッサル)」が繰り返し述べるように、本来、感情移入なるものは起こっていない。また、如何なる類比も起こっていないし、如何なる類推も、類比による移転も起こっていない」(XIII. 338; vgl. 289)。「自己の体験(例えば、怒り)が、他者の体験にとってアナログン(Analogon)として働く、これはナンセンスである」(XIII. 187f)。フッサールの他者経験論の中には、なるほど伝統的な「類推」説や「感情移入」説の用語や要因が多々見出されるのは否定し得ないにしても、彼にとつて、《内と外》や《物と心》という二元論的前提に立って他者経験を「間接的」とするこれら両説ではなく、「直接知覚」説こそが自然的な他者経験を良く表している、というのが出、発点¹⁴であった。しかし彼によれば、この「直接の間接的か」という二者択一は曖昧で、他者経験は、二元論的な類推や感情移入などしていないという意味では「直接性」を有するとしても、なお別の意味では「或る間接性」(VIII. 62; I. 139)を持たねばならない。もし、他者が自己とまったく同じ直接性をもって経験されるとしたら、「他者の固有なものは私の固有なものの単なる契機となり、彼と私は同一となってしまう」(I. 139)。「他者経験は自己経験と変わる所なく、他者を他者として経験するというこの意味が失われてしまうであろう。他者はあくまで、異他性(Fremdheit)(その意味での間接性・超越性)において経験されるのでなければならぬ。

他者経験とは、他者の経験のことと言えようが、他我(alter ego)は、「他の我」というその意味からして、一方では、「我」を遮示していると共に、他方では、「我」に解消されない「他」性を持つのでなければならぬ。「他者は、私自身の反映(Spiegelung)であるが、本来的には反映ではない。他者は私自身のアナログンであるが、本来的な意味ではまた、アナログンではない」(I. 125)という言い方も、そうした他者経験の持つ緊張関係から来るものであつて、単に困惑を表明するものとのみ解されてはなるまい。フッサルが、一方では、異他なものを固有なものの「志向的変様態(intentionale Modifikation)」(I. 144)と呼ぶのも、他方では、異他なものはあくまで固有なものを「超越する」(vgl. I. 125f., 145)と考えられていることと共に理解されねばならないだろう。それ故、フッサルは繰り返し述べている。「私は他者を単に私の複製として統覚している訳ではない」(I. 146)し、「私が現に見ているものは、記号ではなく、単なるアナログンではなく、何らかの意味

で模倣ではなく、他者である」(I. 153) と。他者経験の問題は、他者を、一方では我との或る類比性において、と同時に他方では我との或る異他性において、経験するという緊張関係を解明することを要求している。

そこで先程の原初的世界に戻れば、そこには、諸々の物体(Körper)のなかに一つの特異なものが見出される。即ち、「私」がそのうちで直接に支配している唯一の客観・キネステーゼ的に「機能する器官」(I. 128)としての「私の身体(Leib)」である。原初的世界とは、この「方位づけの零点」・「絶対的ここ」としての「私の身体」を中心とする方位づけ(パースペクティブ)において現出している世界に他ならない(I. 148)。他者経験を基づける「原初的自己経験」としてフッサールが挙げるのは、何よりも、この(物体として捉えられるに先立ってキネステーゼ的に捉えられている)「私の身体」の知覚であった。「自己の身体の知覚は、或る仕方では、他の身体の知覚の基礎である。これは、私が私の身体から他の身体へと推論するなどということを行うのではなから」(XIII. 267, vgl. XIV. 7, 57)とフッサールは言い、その意味において「私の身体」を「原身体(Urleib)」と呼ぶ⁽¹⁶⁾。他者経験を巡るフッサールの思索は早くから、他者の表現現象から体験(心)への感情移入といった問題の根底にある、他者の身体、の経験の問題へと向けられていた⁽¹⁷⁾。つまり、私の原初的世界に現れる一つの物体に過ぎないものが如何にして他者の身体として経験されるのか、即ち、私にとってとは異なる方位づけにおいて世界が現出しているその方位づけ(異他なるパースペクティブ)の中心たる身体として経験されるのか、そしてそれと一体となつて、私にとっての方位づけの中心たる私の身体が如何にして諸々の物体のあいだの一つの物体として、即ち、他者にとっての方位づけにおける一つの物体として経験されるのか、ここにフッサールは他者経験の問題の核心を見ていた⁽¹⁸⁾。他者経験が他者経験であるためには、私が私の身体へと方位づけられた私の原初的世界のうちにありながら、他の身体へと方位づけられた、他の原初的世界を或る仕方では経験するということではなければならない。

そこでフッサールが繰り返し使うことになった表現が、次のようなものである。即ち、「いまここに」いる私が、「あそこにも、そこにいるかのように」或いは「もし、そこにいたら」(wie wenn ich dort wäre) (I. 146, 148) 持つであらうような

原初的世界を「いまそこから」持つている「他のエゴ」「つまり、²⁰「そこ」という状態において、²¹共に現存するエゴ」(I. 148)として他者を経験する、という。それは、「現前(Präsentation)」に對し、「共現前(Appräsentation)」、「現在化(Gegenwärtigung)」(＝知覚)に對して「現前化(Vergegenwärtigung)」と呼ばれるような、或る種の「現前化」的経験ではあるが、単なる想起や予期でもなければ、単なる想像でもなく(I. 157)²²、まさに一つの経験である。フッサールは言う。「それは、随意の現前化ではあり得ない。それは現在化との絡み合いにおいてのみあり得、……それによって要求されるものとしてのみ共現前という性格を持ち得る」(I. 139)。要するにそれは「私はそこに行くことができる」という私の身体のキネステゼ的能力性(Vermöglichkeit)(I. 146)と「私の身体と他者の身体の「対比(Parung)」と「受動的総合」(I. 141f., 147)に動機づけられた、「一つの新しい類型の現前化」(I. 145)であり、「経験の固有の「一つの根本形式」(VIII. 63; vgl. XIV. 352)である。²³フッサールは他者経験を、或る時は想起との類比において語り、²⁴また或る時は事物経験との類比において語るが、それは言うまでもなく、他者経験が自己経験や事物経験に還元されることを意味しているのではない。先に見たように、彼は超越を時間的なもの・原初的空間的なもの・異他なものという三つの構成の段階において考えており、これらの類比は、それぞれ構成の段階が異なるとは言え、超越の経験が問題となる所にこそ成り立っていた(vgl. I. 145)のである。他者経験は、或る固有なレベルの超越の経験なのである。(XIV. 8f.; vgl. VIII. 495Fn.)。

しかし、ここで注意しなければならないのは、この超越が、その対概念である内在から単純に切り離すという仕方では考えられてはならないということである。フッサールは、あらかじめ私の原初的世界と他者の原初的世界を《内在と超越》として区別した上で、如何にして両者が総合されるのか、という仕方では他者経験の可能性を問う問い方をはっきり拒否している。というのも、「その区別は既に、他者経験がその仕事を済ませたことを前提している」(I. 150)からである。そこでフッサールは、他者経験における「共現前」を事物経験における「共現前」との類比において語るることによってこれに答えようとする。即ち、事物経験において、「見える」「側面の現前」と「見えない」「側面の共現前」は一体になっており、「同時に、現前且つ共

現前する一つの知覚の機能共同性にある程に融け合っている」(ebd.)ように、つまり、およそ知覚が現前のみから成るのではなく、初めからその内に現前と共現前の分裂を含み、両者の協働から成り立っているように、他者経験の場合にも同様だと言うのである。それは、次のことを意味するであろう。他者の身体の経験において、私の原初の世界における物体として、の、現前と、彼の原初の世界における身体としての共現前とが、言い換えれば、現前している私の原初の世界と、共現前している彼の原初の世界とが、或る一つのものの分裂として協働しており、両者が同時成立的な関係にある、ということ。とすれば、私はまず、私の原初の世界のうちにあり、次いで、他の原初の世界への踏み越えが越える、という二段階的な経験の進行を語ることはできない。ここでは、「時間的に先行する自己経験に基づくような経験の時間的発生といったことが問題ではなく」(ebd.)のである。

さて、それ故にフッサールは、ここでの他者経験の分析を「静態的」と呼んだのであった。この表現はやはり、同じ『省察』の中にも見出される「静態的」現象学と「発生的」現象学の対比 (I, 110, 163) を念頭において使われたものと解すべきであろう。では、それはどのような対比だったのだろうか。

四 他者経験の発生

フッサールは一九二〇年代になって、この「静態的」現象学と「発生的」現象学の区別と関連について盛んに語るようになる。⁽²²⁾ それによれば、「初めに形成される現象学は、単に静態的」であり、それは、「博物誌的な記述に類似した」(I, 110) 記述的な性格を持つ「構造」の研究、即ち、「発展して出来上がった段階における主観性の具体的な類型の研究」(XIV, 481) である。それは、「構成する意識と構成される対象の相関を追う」(XIV, 38) ような「構成的記述」であり、ここでは、「説明的な発生については問われない」(XI, 340)。しかし、この「すでに発展した、主観性に関わる対象の、静態的」な構成

には、アプリオリな発生的構成が、しかも必然的に先行する前者に積み重ねられて、対応」(XVII. 257) しており、静態的現象学に続いて、それを「手引き」(XIV. 41) とする高次の段階の問いとして、この静態的な構造そのものの発生・歴史を問う「動態的 (dynamisch) な発生的現象学」(IX. 286) が築かれる。おおよそ「意識の理論は、統覚 (Apperzeption) の理論」(XI. 339) であり、「すべての統覚はノエシスとノエマに従った構造を持つて」(ebd.) おり、静態的考察においては、それが「出来上がった統覚」(XI. 345) として考察される。しかし他方で、「意識は、絶えざる生成 (Werden)」(XI. 218) であり、すべての出来上がった統覚は、背後にその「歴史」、即ち、時間的発生」(XVII. 316) を持つ。発生的現象学はこの「歴史を追う」(XI. 345) のである。しかし、それは「心理学的発生」の問いとは異なり、あくまでも「現象学的還元において」考察される「内在的発生」(XI. 117) である。それは、「心理学の心的物的な外的考察を使用することなしに、経験現象の志向的内容に入り込むことによつて、歴史へと導くことになつて、志向的な指示を見出す」(I. 112f.) のである。

フッサールは、こうして一九二〇年代の講義と著作の至る所で、二つの現象学的方法の区別と関連について述べ、静態的研究をもつて開始された現象学が発生的研究によつて深化されねばならないことを説いているが、この点において、一九二九年の講演に基づいて執筆された『省察』も、決して引けを取るものではない。ところが、肝心の他者経験論においては、確かにいくつかの点において発生的考察が利用されているが、全体の枠組みとしては、「静態的な分析」である⁽²³⁾。しかし、他者経験も一つの統覚——「類比的統覚」(I. 138) ——であり、そのノエシス的・ノエマ的構造において考察され得るだけでなく、その「歴史」について発生的に考察され得る筈であり、静態的な考察は、そのような発生的考察によつて深化される筈である⁽²⁴⁾。

フッサールは一九二二年の草稿でも、発生的現象学の課題として、「如何なる意味で、一つのモノダの発生が他のモノダの発生に噛み込み、発生の統一が多数のモノダを法則的に結合することができるのか」、或いは、「私の受動性は、すべての他者の受動性と結合している」(XI. 343) ということを述べていた。このように彼は、『省察』以前に、他者経験の発生的考察

を眼中に収めていたにもかかわらず、『省察』ではそれに立ち入ろうとはしていない (vgl. XV. 15)。『間主観性の現象学へ』に収められた草稿のうちには、このような考察への若干の指示を見出すことができる。それは、「発展して出来上がった」段階における他者経験の前形態を「受動性、即ち、本能的な衝動の生」(XIV. 405)・「衝動志向性」(XV. 595)のうちに求めるものであり、また、モナド的我がそこから発生して来る「生ける流れる現在」——それ自身は、「我なき (ichlos) 流れ」・「先我的なもの (Vor-Ich-liches)」(XV. 598) —— そのもののうちに「他の生ける現在としての他者」(XV. xlix)への關係を見出すものである。²⁶⁾『省察』においても、「エゴはそれ自身にとって言わば、歴史の統一において構成される」(I. 109)と述べられていたが、こうした発生的な考察においては、エゴそのものの発生が問われるのと不可分、に他者経験の発生が問われ、それ故また、原初的経験に基づけられた間主観的経験という静態的な層的《構造》そのものの《発生》が問われることになろう。先に〔前節末〕、私の原初的世界と他者の原初的世界の同時成立的關係を見ておいたが、「エゴと他のエゴは常に必然的に根源的な対化 (Parung) において与えられ」(I. 142)その際、「私の自己は……対化によってこの《私の》という性格を受け取る」(I. 144)と『省察』で述べられていたことも、こうした発生的な考察において、「私の」原初的世界と「彼の」原初的世界との「根源分割 (Ur-scheidung)」(VI. 260)が同時発生的に成立することとして理解されよう。²⁷⁾

しかし、こうした発生的な分析によって、先の静態的分析が無用になると考えてはなるまい。静態的分析は発生的分析に先行し、これに手引きを与える不可欠の段階であるということは、単に、フッサールの思索上の発展から来た順序の問題ではなく、やはり、哲学的考察の秩序、つまり、誤った道に入り込まないために守るべき順序と考えねばなるまい。《発生》の問題が現象学において「超越論的な問題」(I. 110)となり得るためには、静態的な《構造》の記述を経なければならず、それを経ることなく素朴に発生の問題を扱おうとするなら、容易に自然主義・心理学主義・生物学主義へと転落するであろう。しかし、同時に他方で、静態的分析は至る所で発生の問題に突き当たり、発生的分析によって補足される必要が露呈して来る。『省察』の他者経験論は、「静態的分析」と断わりながら、いくつかの発生的概念を持ち込んでいるが、それは、二つの

方法を区別しようとしているにもかかわらず、自ら混同してしまっている、ということではなく、寧ろ、静態的な方法がそれだけで完結し得ず、必然的に発生的な問題への遡行を要求するということ、それによって補完されるのを必要としているということ、を表していよう。従つて、フッサールにとつて問題なのは「静態的か発生的か」という二者択一ではなく、「静態的且つ発生的な」(I. 114, 170; XI. 220)現象学であつて、両者は、相互補完的にのみその本来的な機能を果たすことができよう。他者経験の静態的分析は、発生的分析によって補完される必要があるとしても、それによって取つて代わられる訳ではなく、それ故、静態的分析の静態的分析としての価値を認め、その上でその制約性を問題にし、それを手掛かりにしながら発生的分析を導入するの でなければなるまい。

「省察」の他者経験論は、静態的分析に留まつていた。それは、ここで彼の他者経験への関心が、具体的な他者経験そのものの分析にあつたのではなく、専ら、世界と世界経験の根拠への超越論的な問いに、異他性の経験としての他者経験が如何に関与しているか、という問いにあつたからである。ここで問題になるのは、既に出来上がった世界のなかでの他の人間の経験、他人の心や表情・表現の経験ではなく、我々の世界が客観的な世界として経験される場面そのものに他者経験が如何に関与しているのかということであり、その意味で、彼は他者経験の問題を世界が出来上がる手前のところに設定しているのである。伝統的な「他我認識」の問題が、その元を辿れば、所謂「外的世界の实在性」の問題と根を同じくするものであり、両者が或る密接な連関を持つてゐることは早くから指摘されて来たが、フッサールは、まさに、このような連関において他者の問題を捉えようとしてゐる、と言ふことができる。それ故にこそ彼は、自然的に・内世界的に「経験される他者」(I. 122)を手引きにしながら、「未だ世界的という意味を持たない」……未だ人間という意味に至つていない他者」(I. 137f.)へと考察を進めたのである。このような意味での他者を明らかにしないまま、人間の人格としての他者に向かうなら、他者と問主観性の問題は生世界の内世界的(mundan)な問題であつて超越論的な問題ではない⁽²⁹⁾ということになり、もはや上のような二つの問題の連関は見失われてしまおう。フッサールによれば、彼がこうして「超越論的他者」⁽³⁰⁾と呼ぶよう

な他者の問題を抜きにして、単に他の人間を経験することとしての他者経験の記述や発生に向かおうとするところに、「これまでのすべての理論（シェーラーも含めて）が成果なしに留まった」（T. I. G.）原因が存するのである。しかし、にもかかわらず、静態的考察は発生的考察によって補完される。超越論的問いは、発生的な考察に向かい、発生的な問いは、超越論的な問題となる。ここでは、これ以上、他者経験の《超越論的な発生》の考察を追跡することはできない。しかし、予見的に語ることが許されるなら、このような発生的考察の意義は、何より次の点に存する、と筆者には思われる。静態的分析は、他者経験を専ら「主題的」経験として扱い、言わば《対象としての他者》に関わっていたのに対し、発生的考察は、自己経験と世界経験において暗黙のうちに地平として機能しているような「非主題的」他者経験を、それ故、言わば《地平としての他者》を明るみにもたすことを可能にするであろう。⁽³¹⁾そして、このような意味での他者の問題こそ、フッサールが「超越論的他者」という表題のもとで見据えていたものではなかっただろうか。

おわりに

振り返ってみれば、フッサールの現象学はその初めから、「論理学主義的な構造論と心理学主義的な発生論という二つの暗礁を縫って」⁽³²⁾《現象学的な起源（Ursprung）》の探究を始めた所に形成されていた、と言える。⁽³³⁾そこでは初めから、硬直化した《構造の問い》とすべてを流動化する《発生の問い》を二者択一的に立てることは拒否されていたが、それは何かその間に中間的なものを求めるとか、何か折衷的なキマイラを求めるとかいうことではなく、両者の相互補完的關係として考えられて行った、と差し当たり言えよう。だが、両者の關係をめぐるフッサールの思索には、このような言い方では片づかない問題が残されているように、いま筆者には思われる。しかし、この二つの問いの關係を問い直しつつ、そもそもフッサールの言う《現象学的起源》とは何であったかを明らかにする作業は、また別の話となるであろう。

註

- (1) 例えは、次を参照。M. Scheler, *Wesen und Formen der Sympathie*, S. 232ff.
- (2) I. 121f. vgl. XV. 3f. 以下に「上」は「Husserliana」からの引用は、本文中に、巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で示す。その他、下記の著作からの引用は、括弧内の略号を用い、頁数をアラビア数字で示す。Logische Untersuchungen (LU)。
- (3) 「構造の問う」は「発生の問う」という言い方になっては、XIV. 475Fn.を、また「構造」という語については、IX. 9. 89f., XI. 19f., 70f., 339, etc. を参照。
- (4) Vgl. XIV. Text Nr. 9 u. 10; IV. 243.
- (5) Vgl. z.B. V. 38; XIV. 418; XVII. 260, 286, 290f.
- (6) Vgl. z.B. IV. 242; XIII. 432.
- (7) Vgl. I. 128; XV. 19.
- (8) Vgl. XIII. 57f., 267; XIV. 7, 420; XV. 615, 634.
- (9) 引用中の傍点には、筆者の注を、以下すべて同様。
- (10) M. Scheler, op. cit., S. 228f.
- (11) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, p. 412.
- (12) Vgl. z.B. XV. 507, 536.
- (13) フッサール現象学においては、感性的知覚が志向的意識一般の「典型的な例」と見なされ、「構成の層」において、この知覚の場面より「下」に《時間》意識が、その「上」に《他者》意識が考えられる。トヘルトは指摘している。K. Held (Hrsg.), *Edmund Husserl/Phänomenologie der Lebenswelt, Ausgewählte Texte II, Einleitung des Herausgebers*, S. 12f.
- (14) Vgl. IV. 375; VIII. 62; XIII. 188. 「類推」説批判から出発して、「如何なる推論でもなく、或る根源的で、それ以上遡るべからざる、驚くべき事実」「本能的事実」としての「感情移入」説に至ったト・リップス (Th. Lipps, "Das Wissen von fremden

Ichen" in *Psychologische Untersuchungen*, S. 697, 713) 及び「心的・物的に無差別な」新しい知覚概念は「類推」説の二元論的枠組みそのものを根本的に変更しようとする「他我の（直接）知覚」説に至ったシェーラー (M. Scheler, op. cit., S. 216, 256) は、共にフッサールが注目して取り組んだものであり、当面の我々の関心にとって重要であるが、この二つに立ち入る暇はない。リッペンズは XIII. 21ff., 38ff, 70ff. usw. を、シェーラーは XIII. 73; XIV. 335 を参照。

(15) 「想起は知覚の志向的変様態 (Abwandlung)」、過去意識は今意識の変様態、他者経験は自己経験の変様態」とする所に「フッサール現象学の隠れた思弁的要素」として「原様態 (Urmodi) の優位」を指摘するフィントクの議論も、「変様態」を「原様態」に還元されるものとして、その超越的性格を無視してしまおうとすれば、フッサールの意図からはされることになさう。E. Fink, *Nähe und Distanz*, S. 153f.

(9) VIII. 61; IX. 107; XIII. 57; XIV. 9, usw.

(17) Vgl. XIII. 62, 70; XIV. 336.

(18) 私の身体を一つの物体として統握すること（それはまた、私を一人の人間として統握することに繋がる）は、原初的な経験においては不完全さを免れず (vgl. XIII. 238) 、『その欠落を埋める為には、或る「迂回」(XIV. 62) を必要とする。それは、言わば自己を自己の外に「押し出す」(XIII. 259f, 344) 、『その意味は「自己を除外する (selbstentfremden)」(XIII. 441ff.; XV. 589) 』とたまたまして、他者の現実的経験に先立つ可能的経験 (XIII. 253) として他者先取りして、「他者たう迂回路」(XIV. 62) を経た自己経験（第一節参照）である。それ故、自己経験における「私の身体の物体化」は、他者経験における「他の物体の身体化」と表裏一体を成しており、フッサールは他者経験としばしば同義的に使う「感情移入」という表現を、後者のみならず、前者に対しても用いる (XIII. 441f; XIV. 61f.)。《原身体の物体化》の問題は、晩年に至るまで、問主観性を巡るフッサールの思索の一つの中心をなっており (XV. 648ff.) 、『ロセルティヌス説の転倒』とどう問題がわかって知られてくる草稿において、「大地 (Erde)」の思想が「原身体」との類比にならざるを得ないもの、このような脈絡におこつてあることに注意された ("Grundlegenden Untersuchungen zum phänomenologischen Ursprung der Räumlichkeit der Natur", in *Philosophical Essays in Memory of E. Husserl*, p. 323)。

(9) 「想起はなす」の例えは、XIII. 56; XV. 560 を参照。「単なる想像はなす」の例えは、アギエーレが

- 詳しへん跡にせよ。A. Aguirre, *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, S. 153ff.
- (20) “wie wenn ich dort wäre”という表現が、「想像」を表す「非現実の接続法」と、「想起・予期」を表す「可能的接続法」との「混交態」であることを指摘したヘルトは、両者が協働しないことにフッサール他者経験論の「挫折」を見ている。この「徹底してフッサール内在的な批判」は明晰であるが、筆者には、この「挫折」の指摘よりも、ヘルトがそこから引き出す「単純な洞察」の方が重要であり、それはまた実はフッサールのうちに潜んでいた洞察ではないか、と思われる。即ち、「想像」と「想起・予期」と「他者経験」という「三つの現前化の等根源性」という洞察である。それは、他者経験を「経験の一つの固有の形式」として認めてこそその意味してこえよう。K. Held, “Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie” in *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, S. 44.
- (21) XIII. 56; XV. 96, 191, 447, 487ff., 591, 598. 『危機』書に語られる「脱—現前化 (Ent-Gegenwärtigung)」(他者) と「自己疎外 (Ent-Fremdung)」(他者経験) との「類比」(VI. 189) というのも、このような脈絡で理解されねばなるまい。
- (22) 発生的現象学の成立にあたって「一九一八年におけるナトルプの著作の研究からの影響を最も重要」とする I・ケルン (Kant und Husserl, S.355) の解釈に対しては、様々な疑義が考えられるが、成立史的な問題にここで立ち入る余裕はない。
- (23) Vgl. auch XIV. 412Fn., 477.
- (24) フッサールは、一九二五年の講義『現象学的心理学』第四三節 (IX. 216f.) では、これまでの考察を必然的に補うものとして、第一に、「モナドの「静態的」研究から「発生的」研究への」、第二に、「抽象的な独我」から「他の主観」への研究の進展を挙げているが、二つの進展方向は単に併記されているだけで、両者がどう絡み合うのかについては何も触れていない。この点、その他の著作でも同様で、「他の主観」と「間主観性」の問題の「発生的」考察を明白に論じている箇所は、多くない。
- (25) ランドグレーベは、この「共同化の本能的志向性」としての「原衝動」のうちには、「批判者達をもフッサール自身をも満足させることになかった、間主観性の問いへの答えが見出せるような方向へのいくつかの指示」を読み取る (L. Landgrebe, “Das Problem der Teleologie und der Leiblichkeit in der Phänomenologie und Marxismus” in *Phänomenologie und Marxismus* Bd. 1, S. 96) が、それが果たしてそのような「指示」となり得るか否かは、本稿以下に述べる論点から慎重に吟味されねばならぬ。

たこと、筆者には思われる。

- (26) Vgl. XV. 587, 589f, 640; K. Held, *Lebendige Gegenwart*, S. 164ff.
- (27) こうして、第一節の初めに見た、自己経験と他者経験の相関性が、発生的現象学の観点から意味を与えられる。
- (28) Vgl. z.B. L. Feuerbach, *Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie*, §. 41.
- (29) これは、A・シムツの立場である。A. Schutz, *Collected Papers*, vol. 1, p. 164f.
- (30) Vgl. XV. 16, 114, 210, 365 usw.
- (31) Vgl. XV. 497. ヘルツが「省察」の他者経験論の「修正の唯一の可能性」と考えたのも、この方向であった(“Das Problem der Intersubjektivität……”, S. 47, 50)°
- (32) J. Derrida, *L'écriture et la différence*, p. 230.
- (33) Vgl. LU. I 164, 244.

〔付記〕

本稿は、第三七回西日本哲学会(一九八六年十一月二十日、西南学院大学)、及び、第九回日本現象学会(一九八七年五月二十五日、国学院大学)において口頭発表された草稿に加筆訂正をしてみたものである。両学会の席上及びその他様々な機会に有益な御批判と御教示を賜った方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。また、本稿は、DAADの奨学金によって可能となった、一九八四年十月から一九八六年九月までのケルン大学及びブッパタル大学における研究の成果の一部であり、併せて関係者の方々に感謝したい。

(西南学院大学非常勤講師・昭和五十九年本学院院博士課程修了・哲学)